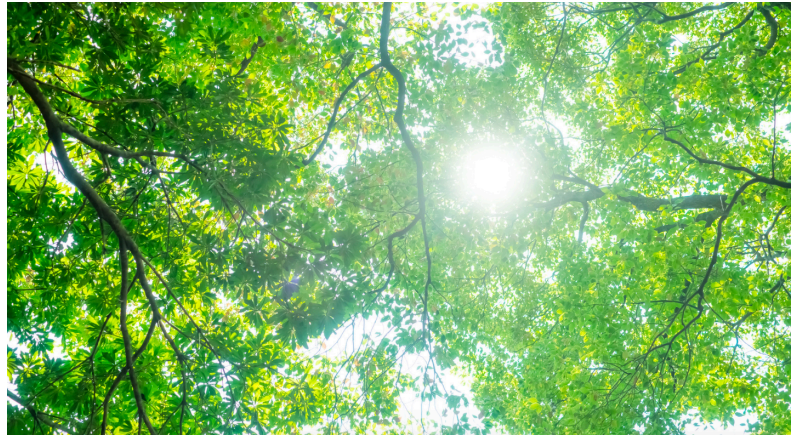


猛暑・思考停止・迷い

猛暑と冷房に心身の健康を維持するために多面的な工夫が求められている。個々人の知恵が結集されて、政治家を動かし、大企業、大富豪を動かさなければ壊滅的な危機が到来することを殆どの方が分かっている。AIの脅威的な進歩で未来予測も正確になっている。そんな大それたことを私のような者が言ったところでどうにもならない。せめて自分の身だけは当面は守りたいと思う。

1、家庭ゴミの分別

我が家では厳しいゴミの分別がなされている。今まで何気なくゴミ箱に捨てていたものをルール従って分別することはかなり面倒である。その実践の中で気がついてことは「紙よりプラが圧倒的に多い」ということである。何かを買う、必ずゴミになる、消費行動はゴミを作り出す。それも「プラ」塵である。



我が家では台所から出るゴミは徹底的に水切りをしている。これが最終処理に大きな貢献をしていることを教えられたからである。小さなことしかできないけれど、迷惑も最小限度にする努力を個人ベースですることは、目には見えないけれども大きな社会貢献でありおそらく選挙で一票を投じるよりも効果があると私は思う。

2、冷房との苦闘

猛暑と冷房の戦いに色々と工夫している。

毎月福岡空港に最低1往復している。夏場は移動中に冷房にやられる。博多までに要する時間は自宅から5時間30分、冷房の中に座っているだけ。飛行機でも新幹線でもほとんど変わらないところに住んでいるから仕方ないことである。



移動中の冷房を少しでも緩和するために、今回は大阪で下車して、息子の家に泊めてもらった。我が家同然に山の中なので冷房はない、自然の空気は涼風である。睡眠もしっかりとれる。次の日は午後伊丹空港に送ってもらった。半分は移動できているという感覚であったが、

福岡までの飛行時間は80分で羽田空港からの100分とあまり差がなかった。加えて使用される機体がプロペラ機であった。かなりフライトの経験はあるがその轟音は難聴の私にも苦痛であった。この方法もダメだと分かった。次は新幹線の乗り継ぎを試そうと思う。

3、ホテル・ライフの工夫

ホテルに2泊以上するときには夏掛けを持参している。ホテルの布団の基準は冬に合わせているようであり、夏は冷房を好みの温度で入れたまま寝るというスタイルである。これが私にはできないので自分に合った夏掛けを持ち歩いているがホテルの冷房機能の特徴と合わせるために数時間を要する。悪戦苦闘して夜があけることがしばしばである。

ホテルで困ることが多くなった。都会のホテルでも温泉大浴場の設備を持つところが多くなって人気を呼んでいる。私も部屋の小さな風呂よりも大きな風呂や露天風呂で体を芯から温めたいと利用していた。行きつけのホテルで、あるとき大浴場に行くと二つある浴槽の一つが泡風呂になっていた。知らない人は何の疑問もなく入っている。しかし、私はおかしいと思い、風呂場に備えられているシャンプー類を点検すると殆どの容器が半分になっている。中には空っぽになっているものもある。日本人からするとイタズラであると思われるが、外国の人は温泉で泡風呂を楽しむためにシャンプーを風呂に入れるという。クレームにもならないらしい。手拭いは湯船に浸けて体を洗う。文化の違いを迷惑と言っては国際的な客は迎えられない。かくて私は大浴場を諦めた。



ホテルの備え付けの小物は使用しない。清掃も自分でする。我が家と同じ基準でコンビニで買ったお弁当の空箱は水洗いをしておく等々。チェックアウト後清掃係の人が少しでも効率よく働けるようにと思っできる限り整理整頓をしている。しかし、これも迷惑らしい。散らかった部屋の方が清掃がしやすいと言う。綺麗な部屋はつい、手を抜いてしまうらしい。ありがたい迷惑だそうだ。だからといって、散らかしてチェックアウトができないのが日本の文化だと思う。

4、車内の雑誌

久しぶりに新大阪までグリーン車で移動させてもらったので、車内で備え付けの雑誌に目を通した。「石油危機から50年」というタイトルが魅力的で読み込んでしまった。脱ロシア、脱炭素時代を生き抜く。日本に必要なことは次のように結論づけられていた。

(1)経年劣化と安全の闘いは？

脱炭素安定供給・コスト削減日本の最重要課題は原子力50年のカーボンニュートラルに向けた抜本的な取り組み強化も不可欠だ。省エネ・再エネ水素・原子力など全ての分野で課題山積だが、日本にとって、最重要課題の一つは、原子力に関わる問題である。安全性を確保した上で再稼働を進め、既存炉の運転延長制度の見直しなどで有効活用が促進されれば、二酸化炭素(CO₂)削減、電力安定供給電力コスト削減の全方位を効率的に実現できる可能性がある。岸田文雄首相はその重要性を踏まえ、再稼働・運転延長制度に加え、小型モジュール炉 (SMR)など次世代炉なども含めた新增設への取り組み強化を進めている。今後の成果に期待したい。(Wedge.vol.35.No7-p21)

この筆者は日本エネルギー研究所の専務理事であるから、当然の帰結を書かれている。私が不思議に思うのは物は経年劣化するという、いくらメンテナンスをしても部分を全部取り替えることができるとしても新品にはならない。部分の入れ替え、修理の継ぎはぎは全体のバランスがとれない。それは中心を持たないからである。運転延長という言葉にはマジックがかかっている。安全第一なら経年劣化には目をつぶるわけにはいかない。物質の劣化を減価償却の延長という会計学上の言葉で上塗りをしているだけである。家庭にある冷蔵庫、洗濯機は修理しても減価償却・経年劣化は止められないことを私たちは知っている。原子炉も例外ではないが、再び原子力神話が頭をもたげてきた。

(2)世界経済はまるで「モナ・リザ」

私はこの記事に魅惑されてこの月刊誌に惹きつけられた。まず、記事を要約する。

英『エコノミスト』誌は現在の米国経済に関して、まるで「モナ・リザの絵を見ているようだ」と表現した(2023年4月22日号)。正鵠を射た指摘であるというのは国際金融市場に40年以上も身を委ねてきた有名なエコノミストである。

その意味するところは、「ここまで先の読みづらい状況は初めてだ。米国経済はモナ・リザの如く、その時の見方や心境によって、日々その表情が違って見える。年初来の経済指標は強弱入り混じっており、その『素顔』が掴みにくい。」



経済のことはさておき、「モナ・リザ」の見方に一つの道をつけてしまったようだ。

レオナルド・ダ・ビンチの謎ときがまだ続いているのも面白いと思う。

この筆者はこの後、アメリカの経済状況、ユーロ圏の状況を分析し、最後に日本に言及している。その部分を引用する。

昨今の動きを簡単に振り返っておこう。まず、今年3月10日に米国西海岸を拠点とするシリコンバレー・バンク(SVB)が経営破綻し、米連邦準備制度理事会(FRB)は破綻懸念の拡を回避しようとやや小規模の-----中略-----ユーロ圏も執拗なインフレへの対策で欧州中央銀行は利上げを継続せざるを得ず、景気浮揚への期待値は乏しい。ゼロコロナが明けた中国経済に期待が集まるが、政治不信や不動産不安で海外資本の“中国離れ”は加速しており、内需回復ペースも予想されたほど力強くない。世界経済は、グローバルなインフレと米国の景気後退、そして期待外れの中国経済といった「三重苦」に見舞われて、予想以上に低迷が長引くこともあり得よう。

そうした不穏な海外情勢は、間違いなく日本経済への逆風になる。足元では「コロナ禍明け」の消費回復やインバウンド復活期待で外部環境悪化への警戒感が薄れ、株価も上昇基調にあるが、予断は許さない。加えて、先述したような金融政策の微調整による市場の不安定化も危惧される。仮に、物価はいずれ低下するとの安易な予想の下で金融緩和措置が延命されることになれば、欧米が陥ったような「思わぬ物価の反乱」に襲われるリスクも浮上しよう。年後半以降の日本経済もまたモナ・リザの如く、表情を読み取るのが難しくなりそうだ。先が読めない時代だからこそ、リスク・シナリオに備える。この鉄則に立ち返ることが求められている。(Wedge.vol.35.No7-p10)

イギリスのエコノミストの「モナ・リザ」観が日本の経済にも関連し、世界の「金融危機のリスクに備えよ」と警告している。日本のオピニオン・リーダーの文章だからその影響は大きいと思われる。芸術と経済、経済からみた芸術、芸術からみた経済、色んな見方が自由にできることは幸いなことだ。パリの猛暑の中でガラスに保護された微笑みは「現代人をどんな思いで微笑しているのか」パリに行ってみよう。

パリ通信 (139号)

聖ドニ大聖堂

7月14日「フランス革命記念日」はフランス絶対王制の終焉とフランス共和制の始まりを記念する祭日である。今年はパリでフランス語研修中の日本人学生グループと一緒に「聖ドニ大聖堂」を見学した。

3世紀イタリアからキリスト教伝道のために弟子ルスティクスとエレウテルスを連れてパリに来たのがデイオニシウス(聖ドニ)で、パリ最初の司教になる。伝説によれば、モンマルトルの丘で異教徒に剣で首を落とされた聖ドニは、自分の首を拾って両手に抱え、サン・ドニ(パリから北に約20km)まで歩きながら説教を続けたという。



弟子二人も同じく斬首された。聖ドニが息途絶えたという場所に「聖ドニ大聖堂」が建立されている。5世紀から何度も建て替えられたが、12世紀聖ドニ大聖堂司祭シュジェ(1081-1151)の意により、当時最新の建築技術であるゴシック様式の教会が生まれる。「交差オジーブ(教会建築でアーチ型の天井を支えるリヴ)」によって高く伸びる空間、ステンドグラスを施した「バラ窓」から色取りどりの明るい光が差し込み、光に溢れる内部は実際の高さ(29m)より

圧倒的に高く見える。

ゴシック様式が頂点に至る13世紀はルイ9世(聖ルイ王)の治世である。パリにサント・シャペルを建立し、シャルトル大聖堂のバラ窓を寄進し、聖ドニ大聖堂の建替えに出資した聖ルイ王によって、今日、42名の王、32名の王妃、63名の王族を納めるフランス王家の墓所に相応しい大聖堂となったのである。

キリスト教に改宗した最初のフランス王クロヴィス1世(フランク王メロヴィング朝)(在位481-511)。カロリング朝ピピン3世(小ピピン)からカペー朝、ヴァロワ朝、ブルボン朝とフランス絶対王制の王の横臥像が並んでいる。1515年若年20歳で「マリニャンの戦い」で勝利を取ったフランソワ1世の墓は、勝利を讃える大きな凱旋門と古代ギリシア・ローマの柱で飾られ、ダヴィンチを擁護し、イタリア・ルネサンスをフランスに導入したフランソワ1世を象徴する作品である。

フランソワ1世の息子アンリ2世とフィレンツェから王妃として迎えられたカトリーヌ・ド・メディチスの墓はピンクと白の大理石の台座に黒の像を配す(異なる色を好んで併用する)イタリア・ルネサンスの特徴を有している。

1793年1月コンコルド広場でギロチンに架けられたルイ16世と同じく1793年10月コンコルド広場で斬首されたマリーアントワネットの像もある。ルイ16世とマリーアントワネットは処刑後マドレーヌの墓地に埋葬されていたが、ルイ16世の弟でナポレオン1世失脚後王政復古で王になったルイ18世が遺灰を聖ドニ大聖堂に移す際に造らせた1830年頃の像である。

地下礼拝堂があり、聖ドニが葬られたとされる
ところ、カロリング朝時代の柱、発掘された石
棺などを見ることができる。ルイ16世とマリ
アントワネットが処刑された後、8歳で2年間
だけ牢獄で王位を継いだルイ17世の墓碑が
ある。1785年ヴェルサイユ宮殿で生まれ、
1789年フランス革命で捕らえられ、幼少
のためギロチンは免れたものの牢獄で病
死した。

ところが最近になって、実はルイ17世は
牢獄から脱出して生き延び、自分はその
末裔であるという者が出てきた。ルイ17
世の墓を開き、心臓のDNAをマリーアント
ワネットの髪の毛のDNAと比較鑑定し、
ルイ17世は間違いなく1793年パリで死
亡したと証明された。ルイ17世の心臓は
ガラス瓶に入れられ墓碑の下に納めてあ
る。

最後に聖ドニ大聖堂に入ったのはルイ18
世で、棺には名前が彫られているだけで
何の装飾もない。ルイ16世を始め、散
逸した王家の遺骨や墓を聖ドニ大聖堂に
集め、自分もそこに眠る最後のフランス
王である。

6世紀キリスト教の王となったクロ
ヴィス1世からルイ18世まで1300年の
フランス王家の墓所となった聖ドニ大聖
堂。革命期にはバラ窓も壊されて荒れ果
てた聖堂を修復したのは19世紀の建
築家ヴィオレ・ル・デュック(1814-
1879)。火災で喪失したパリ・ノートル
ダム寺院の尖塔を建て、カルカソンヌ
城を再建した人である。世界史の教科書
に過ぎなかったフランスの歴史を
実際の建物や作品に触れることで
身近に感じる見学だった。(古賀順子記)

写真の教会地下の聖ドニの墓跡に掲げられている聖句は次のとおりです。

一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、
死ねば、多くの実を結ぶ。

ヨハネによる福音書12章24節

フラ ルイ16世とマリーアントワネット王妃の墓



